みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# 記憶装置としての民俗空間 : 新島若郷



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2016-03-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 森, 明子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00005944 |

# 記憶装置としての民俗空間
## －新島若郷－

森　明子

若郷の山には、山のヒトが住んでいる。

山の神様の木は、一本も伐ってはいけない。木の枝も、一っ葉も、持ってきてはいけないという。正月の9日に山の神様が山へ木の種を蒔くから仕事に行ってはいけない、と昔の人は言って、村じゅう総休みをした。この山には、昔は三人くらい大きな松の木があった。その木を、うちらとマゴバアサンの親が宮棟梁だから、そのおじいさんて人が神様つくる木に「この木がいいでしょう」と言った。そうしたら、たったそれっくらいの言葉で、神様の住んどる木だもの、そこに住んでいたヒトが、そっちのアワイサマの方の中途の松ノ木へ行って、それからハタシロサマへ上がった、神様が。うちの人は、子どものある、もう働く女衆が3人も、とられた。男の人が一人あって、それもとろうと思ったけれど、うちのニハシラだからその子だけはとらないと、神様が言った（Rのおばあさんが拝む人で、神様のことばを告げた）。それで昔の親は、「アワイの浜へしたものは、絶対に取って食べんな」っていいつけにしてあった。だから1年に1回ずつ、ばあさんらがハタシロサマに行く。天気が悪くても行くよ、私も。

（若郷、K女）

本村の宮塚山にも山のヒトが住んでいる。

新島は、今こんなに開けているけど、昔は山に行ってもいろんなのに会った。
お正月、まだ山へ人が行かないときに、お米持って行けばよかったものを、正月の一番のハツメエリだもん。新島じゃあ、畑とか山行けばみんなマツルのよ、オシンメイ（お新米）っていう。ハシタテって、ヒノキヤマのあっちにある神様がホッカムラシタって。きれいな女の人が自動車に乗らしてけろって。隣へ乗っけて宮塚山へ上がる道の前に来たら、「こっちよれ、こっちよれ」って呼びうっていうぞ。そうしたら土手へぶっつけちゃって、その人間はいなくなっちゃった。それで手がつけられなくて歩いてきたところが、オレと会って身震いしたって。オレ、同級生の新年会で、会費集めてて、そのオトウサンに、観音様で行き会った。そのオトウサンは、若いうち死んじゃった。オカアサンも、もう67くらいじゃあないの。うちへ行って、「Tに、ひとり行き会った」って言ったって。だから正気にはいただよな、別に酒にいたわけじゃない。昔はそんなのあったでよ。それだから、ムラへとへんなもんが下りて来ないように、観音さまのそこに、こういうでかい石で、塔たっちょるのよ。そこにもう、ムラへ下りてこないように、封じ

ちゃうだ。「何でこれはよ」って聞いたらよ、山から来ないようにだって。だから、新島にも、なんやいろいろあったぞよ。

（本村、T女）

目には見えないが霊威をもつヤマのヒトを、村の人は畏怖し、人の世界にはいってきて社会の秩序を侵さないように慰撫する。ここで、若郷には若郷の、本村には本村の、それぞれのヤマのヒトがいることに注意したい。本村の人は若郷のこのようなヤマのヒトの話を知らないし、本村の人が怖れる宮塚山は若郷の人にはいっこうに恐ろしくない。

人が住む空間には、人が社会的・文化的な意味を与えている。本稿は、民俗世界が空間を区分していることに注目して、若郷というひとつの民俗世界を領域から記述しようとするものである。

## Ⅰ．若郷の地形

若郷の成立については、すでに東京都の調査において報告されている。それによると、18世紀の初頭（宝永年間）に、本村の北村が崖崩れにあったことを契機として、移住がなされたらしい。本村の北側にたちふさがっている宮塚山の東側の山腹を抜け、東にアッチヤマをやりすごして下りきったところに、クダマキ橋がかかっている。クダマキは、宮塚山、アッチヤマ、ジナーカー、新島山という四方の山の山すそが落ち込んでいる谷で、付近一帯に若郷の畑が広がっている。クダマキからさらに、新島山を東に見ながら北上していくと、島の北端近くの若郷部落にたどりつく。

浜に臨む郷は低地に位置し、道は坂を降りきって郷に入る。この道はそのまま郷の中央をつっきって神社につきあたり、その東西に屋敷地が整然と配されている。神社と反対の、郷の南端に近いところに寺と墓所がある。郷の東側は新島山の崖が屏風のようにそびえ、北は神社の背後にネブサキの山がそびえる。西は前浜に臨み、もとはここに漁船があがっていた。西が海に開かれているとはいうものの、郷はひとつの口しかもたない袋のように、外界の刺激にさらされにくい世界を形成している。袋の口にあたるのが木戸である。新島山やネブサキの山への登り口も、木戸の坂を上り、畑をつきぬけて山へとりかかる。

図1　若郷周辺

新島山の崖の裾を腰の下といい、そこには常用の野菜のために、わずかのウチバタ（内畑）が開かれている。それ以外の畑は、木戸の上からクダマキ一帯に広がる。新島山、ネブサキの他に、ジナーカーも若郷のヤマである。アッチヤマは、若郷と本村の両方の山だといわれている。

ジナーカーはトブネ港の上方の山をさす。トブネ港は、もともと嵐のときなどの非難港であったが、1961年、護岸をつくって若郷漁港と定められ、漁船は前浜からトブネに移動した。船が郷の外へ出されたことによって、漁業はますます人々の家庭生活から遠いものになった。かつて「男は漁師」というほど、漁業は若郷の経済生活、社会生活に重要な位置を占めていたが、漁業の重要性は、若郷社会において相対的に低下してきている。

## Ⅱ．家：歴史を空間にとどめる言語

若郷部落の特徴のひとつは、整然とした屋敷割である。郷は、木戸から神社へと延びる道路を軸として、その両側に4軒を1ブロックとした屋敷地が配されている。この屋敷地の面積は、ほとんど一定している。

各屋敷地にオーヤとインキョが建てられていて、オーヤに当主の家族が、インキョに当主の地位を譲った親夫婦が生活する。村武・郷田の著名な研究は、このオーヤとインキョが別世帯を形成しなが

写真1．　文化7年作成　若郷村地図

ら、ひとつの「家族」を構成していることに注目している。村武・郷田が「家族」という概念によって整理したものは一区画の屋敷地に対応し、人々はこれを「家」と呼ぶ。「太平」「弥五左衛門」など、かつての家の、代々の当主の名前を「家の名」として今も記憶し、それが郷内での呼称になっている。太平の家（太平の屋敷地）を「タヘインニ」、弥五左衛門の場合なら「ヤゴデーニ」といい、これが同時に郷内の位置を指示する言語にもなる。たとえば、かつて海岸の砂丘にいくつかの小高い丘があり、これをモリといったが、モリの名前は、その近くにある古い家からとられた。「与一右衛門」の家からまっすぐ浜へおりるところにあるモリは「イーチーモリ」というように。また、井戸にもその近くの家の名前がとられた。「甚左衛門」の家の前に掘られた共同井戸は、「ジンデーイド」という。モリにしても井戸にしても、特定の家の名前が使われるが、それは所有をあらわすのではなく、郷内での位置を示すものである。井戸の名前には、オクチョウイド、テラチョウイドというように、郷を二分する町名も用いられている。

家の名は、郷をマス目に区切った区画の名前にほかならない。それは若郷の者の知識であり、よそから来た者は、まず、その名前を知らなければ若郷の人々と会話することができない。開拓以来数百年、家の名前が変わらず現在にいたっていることが、このような家の名の重要な用法を可能にした。郷はこの屋敷割によって構成されており、若郷の歴史は、この屋敷が描き出しているマス目の中に書き込まれてきた、といえる。

移住の記録が残されている年（1710）から約100年後の文化７年（1810）作成の村地図を、現在若郷支所が保管している。それを見ると、神社、寺、屋敷地の配置による村の基本的な構成は、全く現在と変わらない。そればかりか、そこに記されている38の家の名もほとんど変わらないのである。当時は、寺と墓所は屋敷地の区画の南端に位置し、それより南側は内畑であったが、現在では木戸までヤカタの家（分家等による新しい家）が建てられている。また、海岸部に沿ってもヤカタの家が建てられて、郷は南と西に拡大した。飽和状態になった近年は、木戸から郷を出て、坂の上の霞山に新築の家が建てられている。このような郷の拡大を経験しながら、新しい家の屋敷地の大きさは18世紀以来の古い家とほとんど変わらず、古い屋敷地の中央を通る道は、現在でも郷の中央道でありつづけている。昭和５年には、若郷の大半の家々が焼失する大火があったが、焼け跡に建て直された家々も、かつての屋敷地のマス目をそのまま踏襲して、郷を再現した。ここに、我々は、郷という領域の歴史的な根強さを見せつけられるのである。

郷の歴史は、家の名とともに記憶され、歴史の中の人物は家の名によって示される。歴史を思い返すときには、現在のその家の人が、歴史の主人公となって人々の記憶の中に歴史が再生産されることになる。人の呼称も指称も、世代呼称に家の名を冠して「タヘインカア」「ヤゴデーンバア」のように、家ごとに与えられることは、個人がその家によって特定されることを示している。人も、郷のマス目の中に配置されていると考えることができる。

## Ⅲ. 労働：郷、ノバラ、ヤマ

若郷の人々の活動領域は、郷とノバラ、ヤマ、そして海に分けられる。

海は、船に乗る漁師の男性の世界である。以前は若郷では、男の子が生まれれば、その子がどの船の船子になるのかをすぐに考えたというほど、男であれば漁師であることがごくあたりまえのことと考えられていた。女性が船に乗ることは、今よりも厳密に忌まれたから、海は男性だけの領域であった。女性は、対照的に、陸の上の非常に多様な仕事を一手に引き受けていた。従って、ここでは女性の生活空間をみることになる。

陸上の労働空間は、大きく「郷」「ノバラ」「ヤマ」に区分される。

### 1. 郷

郷は、家々の並ぶ空間で、南北には神社から木戸まで、東西には新島山の腰の下につくられている内畑から浜までを含む。郷は、若郷の社会生活が営まれる空間であるが、労働空間としても、重要な空間である。料理のように必ず家の中で行われる仕事は別としても、女たちは毎夕、井戸と家を往復して水汲みをし、また、屋敷地内のネーバには、イモをふせておいたり、台所ですぐ使う野菜などをつくった。魚の加工にも、畑やヤマのものの加工にも、ネーバは重要な仕事場であった。20年ほど前までは、豚もここに飼われていた。食べ物の余りなどを餌にして１年ほど育て、前浜から豚船を仕立てて生体のまま東京に売っていたのである。

新島山の腰の下には、小さなウチバタ（内畑）が段につくってあって、ノバラに出ないときの畑仕事はここでやっている。

前浜に船があがっていた当時は、数人の女性が協力してヨイトマキで、船を浜にひきあげ、漁の獲物を浜で受取り、シロ分けして、桶で運んできては、屋敷地で加工した。船が出るときの網などの準備も浜で女性が手伝い、また、船に水を汲むのも女性の仕事だった。さらに、夫の漁船の世話ばかりではなく、前浜に東京便の汽船のはしけから荷がおろされと、荷役として働き、労賃を稼いだ。

魚の加工は非常に重要で、クサヤとなる魚を夜遅くまでかかって開く仕事は、女性の労働力に負っていた。漁業は、海で船にのっている間は男性のものだったが、浜から陸にあがれば、女性の活躍を無視してはありえない。ただし、網つくろいなどは、老練な漁師が陸の上でおこなったが。このような、浜に密接に結び付いた女性の労働は、漁港がトブネに移動した1960年代以降は、行われなくなった。

また、ツバキヤマといって、秋に椿の実を一斉にとるが、椿の実は郷において主婦が自分で加工した。まず自家のネーバで実を乾かし、硬い殻が花のように開くと、それを夜なべ仕事に手でむく。そうして取り出した実を、油搾りの設備を持つ家に持っていき、設備だけ借りて仕事は自分たちでした。実をカラウスでついて、黄色い粉になったものを蒸して油をとる。一度とると、二番も搾る。カラウ

スは二つあり、ウスを踏む人と返す人があるから、4軒か5軒で組になって作業をした。作業は4日か5日かかり、搾った油の1割程度を、使用量としてその家に支払った。

アシイレを伝統的な婚姻形態とする若郷では、生家と婚家の間を移動する人の動きが非常に活発である。さらに婚家と生家、キョーデー（キョウダイ）、モイとモイッコ、ニンズ等の、親しい女性はしばしばモヤイと呼ばれる協力関係を結んで互いの労働を助け合う。これらの人々が、整然とした屋敷割に凝縮された郷空間の中で、家、井戸、浜、内畑の間を行き来し、毎朝、墓参りにも行った。若郷の女性は、屋内に座っていることはまれで、郷においてもまめまめしく屋外で働き、非常に多様な仕事をその手でこなしてきた。

## 2. ノバラ（野原）

郷から木戸を通り越し、坂道をあがるともうノバラ（野原）である。現在の坂道は車が通れるように広くしたS字カーブであるが、旧道は、木戸の上は木が鬱蒼と繁る山の中を階段を踏んでトンネルの中を登って行った。旧道を登りきったところに、山の神の社がある。

> リヤカーのないときは、天秤でシモノコヤシをささいで行った。トンネルのまん中ころ、上の、山の神様のところでみんな休んだ。当時は、こうして1回ずつ天秤でかついで行った。向こうから来ても、こっちから行っても、坂道の上のちょうど頂上のところに、大きな松があって、そこで休んでいると、他の人にも会って、話をした。
>
> （若郷、Y女）

写真2. 山の神

山の神は、ノバラへと労働に出て行く女性たちにとっては、郷とノバラの中継点であった。この山の神は、冒頭にK女が語った、大きな松の木のある山の神である。しかし、ここで強調されるのは、冒頭で見たような自然の神に対する畏怖というよりも、むしろ人々の憩う親しみある場所である。

山の神の一角は、木が繁っているが、その周囲には畑が広がっている。山の神からアワイ、トブネ、クダマキ一帯までが、若郷の畑地帯であり、この領域をノバラと呼ぶ。山の神の付近の畑開墾は、それほど新しいことではなく、文化7年（1810）の地図で、すでに、この付近は畑として開墾されている。

畑には、イモ、ムギ、アワ等の雑穀、大根など、おもに自家で主食にするものをつくった。ノバラの畑は、すでに文化7年のころには、アワイ付近まで各家に区画されている。畑にも、その場所によってシンデン、シンバラ、ナカバラ、ホリデイなどの名前がつけられている。ノバラに行く女は、頭に手拭をかぶり、農具をいれた籠を前頭部から背中へかけて、1時間前後かけて歩いて行った。シモゴエをやるときは、ダラオケ（肥桶）を天秤でささいでこの道を往復しなければならなかったのである。

### 3. ヤマ

ヤマを舞台とする活動は、ヤマで自然にできているものの採集活動であり、耕す、育成することは、ほとんど行われていない。ヤマで働いたことは、最近では思い出話の中で語られるだけで、実際にヤマに入ることはほとんどなくなった。

ヤマは、ウエンヤマ（上の山）とシタンヤマ（下の山）に分けられる。ウエンヤマとは、新島山とネブサキで、このふたつは郷の東と北から、郷を見おろすひと続きの山である。登り口は、山の神の先にあり、崖になっている新島山の急坂を上りきると、山頂は比較的なだらかな椿のトンネルになっている。それは、郷の東側を郷と平行に走り、それが北にまわりこんで、ネブサキとなる。シタンヤマは、ジナーカーとアッチヤマである。ジナーカーはトブネ港の上にある。郷から行くときは、山の神を過ぎてから右側にきれていく山で、アッチヤマはクダマキを過ぎてから左にきれて登る。新島の中央にあって、本村と若郷をさえぎる最大の山塊である宮塚山は「本村のヤマ」で、若郷の人のヤマには含まれない。

ヤマで行われる活動で最も重要なのは、椿の実の採集（ツバキヤマ）と薪集め（4月の薪はとくにハルナマッキという）である。どちらも、どの家でも必ず行う女性の労働である。前者は現金獲得の貴重な機会であり、後者は自家の燃料にするので、一年間の家族の生活がかかっている。

ツバキヤマは、9月に役場で設定したクチアケがあって、寺の入口にある石碑前にそれぞれの家から1人の女性が出て集合し、そこから山へとハネテ行った。そのときには、籠にアンブクロを3つか4つ結び付けて、弁当をもってハネテ行く。ツバキのクチアケの取り決めについては、すでに村武・郷田が報告している。最初に神社と寺をやる。神社のツバキは、宮造神社とアワイサマの山を、寺のツバキは寺の山のツバキを、各戸から人が出て半日採り、採れた物をみな納める。残り半日は、ケイト（各自の畑）の椿を収穫する。翌日からネングツバキで、第1日はウエンヤマの新島山とネブサキ

を、第2日はシタンヤマのジナーカー、アッチヤマ方面の採集を行う。ただし、アッチヤマは若郷と本村との共有の山とされていて、アッチヤマの採集は、本村と協議して決められたという。ネングツバキはヒャクショウ（百姓）と言われる40数軒のみが採った。その翌日、オオヤマノクチアケといって全山が、ヤカタといわれる新しい家にも解放された。

ツバキヤマは、このように時間と空間が厳密に規定されている。この一定の条件のもとで、できるだけ多くの椿の実を集めることに、女たちは競争意識を燃やした。椿の実は、よく実のなっている木に上れば、一本の木だけで籠で2つも3つもとれるが、実のなっていない木であれば、全くとれない。女たちは、あらかじめミチハライのときに、よく実のなっている木を見ておいて、それぞれに藤蔓を結ぶなどして印をしておく。それでも早く行かないと、その実のよくなる木の確保はおぼつかないから、みながハネルように競争で山に上って行ったのである。午後、各家からそれぞれ一人ずつが、飲水をもって手伝いに行く。朝から出るのはカア（主婦）で、この午後に出るのはバア（姑）あるいは子どもだった。夕方、暗くなる頃、椿の実でいっぱいになった袋を山からかついで降ろして来る。一度に運べないで、道のはしに家印を記した袋をおいて、往復する場合も多かった。どれほどその日に採ったかは、すぐ皆に知れた。

ハルナマッキは、4月から5月ころ山に入って枝はらいをしてその生の木の枝を背負ってもち帰り、自家の屋敷の家の裏に積んで薪用に乾かしておいた。ナマキを伐るのが許されているのは、このハルナマキの機会だけで、これ以外は、枯れ枝を拾わなければならない。枯れ枝を、燃料にするほど入手するのは困難なので、ハルナマキの機会に、多くの薪を家に貯蔵しておくことが重要になる。ハルナマキは、畑仕事が始まる前に、女性が山にはいって行なったのである。

山では、このほかに、炭焼きや石伐りも行われた。炭を焼いたり石を伐ったりするのは、専門的な技術をもつ男性だが、その運搬作業では女性が大いに活躍した。

このように、陸の領域は、主として女性の活動領域である。陸の上で行う女性の漁業活動を考慮すると、漁業を男性の仕事／農業を女性の仕事と生業活動によって区分することはできない。しかし、海と陸という領域に、男女の労働空間の区分（海：陸::男：女）を見いだすことができる。男は、海に出ていないときは、ほとんど詰所に詰めていた。また、正月カセギといって、島の夏の漁期がすぎると、伊豆方面にサンマやサバをとりに旅稼ぎに出て、正月にならなければ戻ってこなかった。島に現在ほどの稼ぎ仕事がない当時、男は海へと出て、女は郷を守り、畑を耕し、ヤマを歩いたのである。

## Ⅳ. 祭祀：郷の神とノバラの神

若郷の祭祀は、もともと、ホーリサマが専門に司り、それをニギサマが補佐していた。ホーリサマもニギサマも健康な夫婦で、夫が神様の世話をする一方、その妻がヤカミとして、ンバアナカマ（老女の祭祀集団）のタイショウとなり、最前列で太鼓を叩き、ノウノウサマ（神様）に祈りを捧げた。

ホーリサマの精進生活については、坂口が詳しく報告している。

ホーリサマは、代々ヒョーエンニ（兵右衛門の家）が勤めていたが、妻が亡くなり、戦争が激しくなった頃やめた。ニギサマは、ヒーデーニ（平左衛門の家）からケーンニ（嘉右衛門の家）になり、ケーンニからヤゴデーニ（弥五左衛門の家）になった。ヤゴデーニのときには、ほかに神様のことをする者がなかったので、ニギホーリを兼任することになった。ヤゴデーニの夫婦が亡くなってからは、候補者がない。かつては、ホーリサマ、ニギサマの補佐役であった3人の神社総代が、ニギホーリにかわって神社の世話をし、ンバアの中の年長者がヤカミにかわってタイショウとなって祈りを捧げている。

若郷の神社の神事では、ンバアナカマが神様に祈る以外に、本村の祠官（宮司）を招いて行事を遂行してもらうことがある。注目すべきことは、この本村から招かれた祠官による神事と、若郷のンバアらによって行われる祈りとが、決して交わらないことである。ひとつのマツリでも、時間をずらして行われ、一方に参加した者が他方に参加することはない。

祠官の行う神事は、神道の形式にのっとっている。はじめに祠官と神社総代が向かって左側に、施主が右側に対面する。それから祠官は、神と施主との間を往復して、両者の関係を仲介し、神事進行を司る。施主は奉賛会で、それは漁業協同組合役員のほか、村議会議員、消防団、校長、警察官など、部落の諸集団を代表し、すべて男性である。若郷では、奉賛会の会長は、漁業組合組合長が兼任することが決まっている。

一方、ンバアらは、全員が3～4列になって、神に向かって座る。赤いヒッシュウをかぶり、黒の紋付をつけて、手にはオシンメイ（お洗米）を入れたサンゴブクロをもち、神をたたえるミウタをうたう。ヤカミがいた当時はヤカミが最前列で太鼓を打ったが、今は打つ者がいない。かつてのヤカミは、神様拝みを始めると、神様が足りないところは、どこが足りないというように、太鼓をドンドンドンドンならし、神様が身体にのりうつっていた、という。現在では、年長の者がヤカミにかわってタイショウになり、最前列でさきにたってミウタを歌う。ミウタはむずかしく、誰もが歌えるというものではないので、タイショウの存在は、重要である。

神様拝みは、全員が席について姿勢をおちつけたころ、タイショウの次のようなことばで始まる。

「おちついたかや」
「ああ」
「では、はじめましょう。小勢になったが、がんばりましょう」

（1989年12月1日シハスマツリの例）

タイショウがとりまとめるとはいっても、全員が同じ立場にあるンバアらのミウタは、祠官が執り行う神事とは、神に対する関係づけが全く異なる。これは、もともとのマツリの意味が、別のものであったと考えることによって説明される。

写真3.　祀官によるハママツリ.
（1988年6月19日　前浜）

写真4.　ンバアらのハママツリ．ミウタをささげる前に
オシンメイ（お新米）をマツル.
（1988年6月19日　前浜）

写真5.　シハスマツリにおけるンバアらの神様拝み.
（1989年12月1日　宮造神社　神前）

郷土史研究会が作成した「新島の神様」によると、伊豆諸島には事代主命の后神、御子神が点在するが、新島にはその13柱の神様がいる。新島直属の13柱の神々は、あちこち自分の本拠を決め、それぞれ新島を守っていたが、それでは祭祀に不便なので13神を集め、同列に奉祀したのが、新島総社十三社神社である。この13柱の神々の中に、若郷の宮造大明神（本社）と淡井姫后大明神（アワイ）が夫婦神として、さらに鵜渡根后大明神（ウドマ）が事代主命の娘神として、含まれている。

新島本村の祠官が若郷の神社を訪れ、その神事を行うのは、新島の総社の神官として、総社のなかに位置づけられている神様のマツリを執り行うことにほかならない。若郷の外世界である本村の祠官が若郷の祭祀に関わる例は、こう考えることによって説明される。本村の祠官が若郷に招かれる機会は、シカンサマノハツマイリ（正月９日）、ハママツリ（６月20日ころ）、シモツキイワイ（子供たちの３歳と７歳の祝い、11月15日）、シハスマツリ（宮造神社例大祭、12月１日）である。若郷からは、正月３日の御籤ひきに、かつてはホーリサマが、現在は神社総代が、その年の占を伺いに本村の総社を訪れる。

若郷の祭祀と本村の祠官が関わる場合に、その行事の終わりになされる送迎の手続きは注目するに値する。正月のシカンサマノハツマイリは、本村のシカン、神社総代等の一行と若郷のホーリ、ニギ、神社総代の一行がアワイで落ち合い、そこで重箱の交換を行う。その後、神社の管轄とされる若郷の「公的な」神社を参り、飲食の後、夕方、本村にもどる祠官を送り出す。そのときは、消防団が行列を組み、本社のオチョーヤから寺の前まで徒歩で５分程度の距離を、15分間かけて伊勢踊りで進み、

祠官を郷から外へ送り出す。さらに、若郷を代表する者が正月に御籤ひきに本村を訪れたときは、車のない当時は、夕方ササムカエといって、ごちそうを持ってヒンテル（あるいはヂギン、山の神）など、本村との境界と目される地点まで迎えに出て、御籤の結果を聞いた。このような、本村と若郷との交通で、慣例化した送迎の形式は、本村と若郷という別々の祭祀世界が一時的に一体化したのを、再び分離し、その領域の区別を確認する手続きにほかならない。

その他の祭祀について、シモツキイワイの場合は、祝いをする子供の親の代表者が祠官を送迎する。シモツキイワイは、かつてホーリサマが在職していた当時はホーリサマが祝い、祠官が来ることはなかった。ハママツリとシハスマツリは、ともに、漁業協同組合が主催するマツリ神事の執行を祠官に依頼するもので、漁業共同組合が祠官を送迎する。この二つのマツリの別の側面では、ンバアらによって神歌も捧げられているのだが、漁業協同組合はそれには関与しない。そこでは漁協による神事とンバアらの祈りという別々のマツリが、同時に行われていると考えるべきである。ハママツリとシハスマツリのそれぞれにおいて、このようなマツリの二重構造がみられる。

そこで、若郷の民俗世界を領域から捉えようとする本稿では、以下にンバアらの行うマツリに注目していくことにする。若郷の祭祀空間を守るンバアらがノウノウサマ（神様）をマイルのは、正月3日のハツダイコ（初太鼓）、ハルマイリ、ハママツリ、シハスマツリ、諸願ハタシである。個々の神様マイリについては、坂口が報告している。この中で、ハルマイリと諸願ハタシは、とくに「一社なしに」「マツリハズシをしないように」と、ンバアらが強調するもので、若郷中のすべての神様にお参りする。

若郷のすべての神様をマイルことには、若郷の祭祀空間を確認する意味がこめられている。そこで、ハルマイリと諸願ハタシを、ここでとりあげておきたい。ハルマイリは、以下のように行われる。

節分後の、よい日（吉日）を選んで、第1日目を決める。
第1日：本社、ウドマ、元宮に対して神歌を捧げる（於　本社）。
第2日：浜宮、水神に（於　浜宮）、午後、イナリと新神様に神歌を捧げる。
第3日：アワイ、ヂギン、山の神のそれぞれに神歌を捧げる。
第4日：トブネ、ゴリン、木戸のそれぞれに神歌を捧げる。
第5日：ハタシロサマに神歌を捧げる。

諸願ハタシは、12月のよい日を選び、第1日を決めて、同様に諸神を拝む。ただし、諸願ハタシのときはハタシロサマには行かない。

神様を拝みにいくときは、ンバアらは、ヒッシュウをかぶり、サンゴブクロをもった正装に、座布団なども背負っていく。かつては、神様の前で踊ることもあった。この、数日を費やす諸神マイリは、たいへんな負担をともなう。第3日以降のノバラの神様をマイルときは、朝8時頃から始めても、まる1日かかり、暗くなる頃やっと終わる。ハタシロサマへは、車のない当時は、朝4時頃起きて、帰

りは夜になった。ハルマイリに先だって、神社総代が道ハライもしておく。このような諸神マイリで、もっとも重要視されているのは、「マツリハズシをしないように」神様を拝むことである。これが、若郷のンバアたちの、祭祀集団としての最大の責任で、そのために声を枯らし、疲れきっても神様を拝みきる。神歌をうたうときは、どのンバアも、船をゆっくり漕ぐように、身体をゆったりとゆらせる。神歌をうたいはじめれば、力がはいり、神様の声が聞こえて来るという。たとえば、

> ヂギンサマの社が古くなったので、長い間ヂギンサマを山の神の社に入れてあった。すると、「おれはヂギンの御用の神だ、山の神へ来て幾年たつ、それをうたってくれ」と神様がいった。拝んでいる人には、誰が拝もうとも、ちゃんとノウノウサマのいっていることが胸へ浮かんでくる。そういうことが何回もある。それに、みんな真剣になってやるから、先々のことがわかる。
>
> （若郷、C女）

こうして、5年ほど前にヂギンサマの神の社が新築され、神様は山の神のもとから移された。

個々の神について、以下に見ておく。

第1日と第2日の本社、元宮、浜宮、水神は、それぞれ、郷にあって、郷の人々の生活を守る身近な諸神である。本社は、「ウジコのかわいいノウノウサマ」として、最も重要な郷の主神である。元宮は、若郷を開墾したころの、本社をつくる以前の古い神で、この神様のシンは本社と同じだという。すでに本社に移されているが、それでも、古宮サマとして拝む。浜宮は浜ンモリにある漁師の神で、前浜に漁船があがっているころは、港に面していた。水神は、井戸の神である。ウドマは、ウドマ島の神であるが、本社の神様の右側に仮の社がつくってある。イナリと新神様は、いずれも個人の守っている神様である。イナリは、若郷で最も古いといわれ、名主カンベエが勧進したと伝える。新神は、名主カンベエの家の者が海で遭難したことを、神様として祀ったものである。新神様には、郷の人々の歴史が、神の社という形態をとって、刻まれている。その歴史は、年に2回、春と暮れに必ず行われる神様参りで反復され、記憶が新しくされるのである。

第3日からは、ノバラに上がって、ノバラの神を拝む。

アワイと山の神は、人間の持つ土地とは別の、未開の土地を持つ神と考えられていて、人々は、アワイと山の神のものは決して手をつけるな、と戒めている。

アワイの神については、真っ白な砂をもつアワイハマに巨大な根（岩塊）があり、神が住んでいるので、そこに船を泊めても漁をしてもいけないと、漁師の側から説明されている。しかし、その一方で、アワイサマの神域の山には神が住んでいるから、神様の山のものに手をふれてはいけない、という山の神としての説明もなされている。

また、山の神についても、山の神のものは手をつけるな、イモなどつけてはいけない、というように、人間の手でふれてはならない神という説明がなされている一方で、山の神の神歌には、炭焼きの煙をうたい、イモをうたい、船霊をうたっている（文末資料参照）。この神歌では、山の神は人々の

営みにかなりひきよせられている。

ヂギンについて、ンバアらは、御用の神で、役人や旅人の神だ、と説明する。一方、神社の資料に精通している神社総代は、ヂギンはジゲンで「地源」であり、土地の神様だと説明する。郷田は、その報告書に「地源」の文字をあてたが、坂口は「示現」の文字をあてた。「示現」の字が、どのような説明のもとにあてられているのかは、明かではない。ンバアらが御用の神と説明するのは、神歌に御用の神とうたってあるからで、このことは、神歌が人々の記憶のよりどころとなっていることをよく示している。ヂギンは、山の神を通り過ぎた畑地帯の中程にある。文化7年の地図にも、畑に囲まれた一角に社が小さく記され、この地図では、社の奥に「御蔵」も記されている。この蔵は、畑の作物を貯蔵した郷倉であろう。

トブネは、入り江を見おろす崖にあった小祠を、最近、港建設工事にともなってやや低い平地におろした。もともと、非難港であったトブネを高いところから見おろしている神で、青年団の神であったという。海で働く船子たちの安全を守る神と考えられる。

ゴリンは、山の神の周辺の畑から出土したものを祀った個人の小祠で、最近5軒の小祠を一ヶ所に集めた。宝篋印塔を出土したのだとも、鏡が畑から出てきたともいう。落人伝説と結び付けて説明されることもある。

木戸サマと呼ばれるのは、木戸周辺の畑の小祠で、その畑の持ち主が個人で祀っている。坂の上と下にあって、二つとも木戸サマと呼ぶ者、上をキドサマ、下をイソハタノカミと説明する者、2体とも郷の入口にある道祖神だという者がある。下の小祠をイソハタノカミというのは、この場所をイソバタケ(磯畑)というためで、この家の男が前浜で遭難したのを悲しんで、天気の悪い日には女がヒッシュウをかぶって現れる、という伝説が結び付けられている。このヒッシュウカブリの伝説は、落人とも結び付けられて、木戸サマ、ゴリンサマのあたりに現れるのだとも言われている。ヒッシュウカブリは、天気の悪くなる日の夕方、山の神の周辺にあった大きな松ノ木の上に現れていたが、松ノ木がなくなり、神様としてよく封じ込めているので、もう現れないのだという。

ハタシロサマは、アッチヤマのむこう側の突端まで行ってから、山道を降りて行くと、やがて、森の中に、小祠があり、その近くの崖下に岩が洞になって潮が流れ込んでいるのを見おろすことができる。ハタシロサマとは、この潮の流れを、ミホラとして祀ったものである。本村のウエチョウという家の女性がオガミンバアとしての修行をした場所で、この小祠もウエチョウのものである。神様に上げたものも、本村のウエチョウにもっていく。「本村のもんだ」といいながら、「若郷にも近い神様だから」拝みおとしのないようにと、ンバアらは毎年拝みにいく。

ンバアらの祀る神は、このように、郷の人々の生活を守る神、海で働く者を守る神、ヤマをおさめる神であり、また、畑に迷っている魂を封じ込める祈りでもある。春のはじまりと年のおわりに、ひとつとして拝みはずすことの決してないように、それぞれの神に新たな年のお願いをし、また感謝することは、若郷の民俗世界の秩序を確認し、また新たな年にそれを更新する行為にほかならない。

## V．結びにかえて

若郷は、本村とは別の民俗世界で、両者は交わらない。若郷の民俗世界は、郷、ノバラ、ヤマに分けられ、郷は前浜から海へ開ける。海は船にのる男性が活躍する領域であり、これに対して、女性は、ノバラ、ヤマを走り巡って働く。郷は、家族生活の領域であり、男性が中心となって行う政治的、社会的諸関係の領域であると同時に、女性が社会関係を維持し、拡大しつつ労働する領域でもある。

このことは、祭祀においても同様で、男性の主催するマツリは、郷の内部において行われる。それはハママツリとシハスマツリのふたつで、ともに、大漁を祈願し、感謝して、漁業協同組合が主催する。シハスマツリに出される御輿は船形で、本社を出て郷内を一周し、浜宮様に奉納して、浜から海にはいり、その後本社にもどる。男性の主催するマツリは、このように郷を強調する。これに対して、女性の祭祀は、若郷じゅうくまなく「拝みはずしのないように、一社なしに」おこなう。郷の外のノバラやヤマを含めた若郷の民俗世界には、男性の力は及んでいないので、それはさながら、女性の踏み固めた世界であるようにみえる。

最後に、若郷のこのような民俗世界の維持と、最近の生活の変化との関連について考えてみよう。若郷でも、水道・電気の普及、自動車による本村との交通、島内での労働機会の増加、等、新しい要素が次々に流入している。それに加えて、夏の観光客が非常に多く、また年間を通して来る釣り客もあって、多くの家が民宿経営も兼ねている。さらに、新しい家も増加し続け、郷は木戸を通り抜けて南にはみ出し、木戸の上が新しい住宅地になっている。

このように、新しいものをどんどん取り込み、村の景観もずいぶん変わったといいながら、その一方で、上に述べてきたような伝統的な民俗世界の秩序は維持されている。ヤマの仕事は現在では全く行われていないし、かつては村有だった山が、今は個人持ちに分けてあるが、ヤマはいまも大切にされ、ツバキヤマのころと同様に９月上旬には道ハライが行われている。家の名は、いまも郷の人々の共通語で、この共通語に郷の人々の歴史が塗り込められている。祭祀のいくつかは、たとえば、１０月に日本中の神々が集まるというときの、神のデフネマチ、オモドリマチ（1957年の調査で郷田が報告した）などは、全く忘れ去られているが、若郷の諸神を拝む春と冬のマツリは今も決しておろそかにされない。

このンバアらによって歌われる神歌、ンバアらのおこなうマツリが、実は記憶を常に新しく保つすぐれた装置になっている。民俗世界の歴史は、空間に刻みつけられる。しかし、空間がその姿を著しく変え、歴史を記憶する媒体が何もなくなれば、いずれ歴史は忘れられる。若郷では、郷の家々はなお歴史を語る媒体でありつづけ、ノバラやヤマはかつてとその姿をそれほど変えてはおらず、そこで行った労働の様相はなお人々の記憶の中で鮮明に生きている。さらに、この記憶は、ンバアらのマツリによってつねに反復されているので、新しい生活要素が取り入れられても、民俗世界は更新され、なお生き続けるのである。

［資料］

山の神のみうた

向い小山でたつ煙、煙たてども火は見えぬ、
キヨスガハラでさらす布、おいてたたんで三つ二つ、
きよういのばして、かたをつけよう、
かたにやなによと、このまりた、
腰にや小菊、野にや野菊、
さどや咲く花、野に野菊、
腰のあいおば、みつまぎょう、
たたみそよそよ、だいじかな、
めでたきものは、芋のたねよ、
茎長く、葉も広く、もとい根がさす、子がさす、
めでたきものは、お船霊よ、けさおろすばんには、黄金をつみくだる、

（植松マツ女による）

参考文献

坂口一雄
1957 「新島のヤカミ衆」『日本民俗学』5／1：49－60。
坂口一雄
1980〔1972〕 「年貢椿と什物木－若郷村を中心として－」坂口一雄『伊豆諸島民俗考』未来社、pp. 217－220。
西垣晴次
1959 「島の村と家の概観」東京都教育委員会『伊豆諸島文化財総合調査報告』pp. 754－763、東京都教育委員会。
村武精一、郷田洋文、山口昌男、常見純一
1959 「新島・利島・神津島の社会と民俗」東京都教育委員会『伊豆諸島文化財総合調査報告』、pp. 620－704。
村武精一、坪井洋文
1975 「新島若郷の社会組織－世代階梯制とムラ－」蒲生正男ほか『伊豆諸島－世代・祭祀・村落－』未来社、pp. 63－166。